
And I Love You・・・ありふれた日常のありふれた風景・・・

千住夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

And I Love You・・・ありふれた日常のありふれた風景・・・

【Nコード】

N0276L

【作者名】

千住夏樹

【あらすじ】

何気なく口ずさんでいた。

『♪ 傷つけあうためじゃなく 僕らは出会ったって言い切れるかなあ』

今分かる 答えは一つ ただ一つ And I Love You
..... And I Love You.....』

うだるような暑さがここ数日続いている。

大通り公園に屯する家族連れも、餌を強請る鳩の群れも、幾分かこの暑さに不快指数が増しているようだ。

広告塔のデジタルの温度計は真っ赤なダイオードの発光で26度を示していた。

噴水の飛沫に揺れる俄作りの虹ですら今日は、白々しく見える。

オフィス・ビルの窓からそんな景色を眺めていた。陽炎に揺れる窓外の日常すら、ここでは異国の地を思い起こさせる。

会いたくもない人と会い、話したくもない話をし、一日が過ぎてゆく。

入社した頃のあの気概などもうとくに消え失せていた。

毎日、頭をもたげる疑問符が疼く。

空っぽの冷蔵庫のように機械の音だけが虚しく静かにうめき続けている、空っぽの頭……。

したかったこと、しようとしていたこと……日常に埋没してゆく自分の姿はまるで、かつて空を自由に飛び回っていたペンギンが、ただじつと懐かしむように見上げるその姿に酷似している……今日、何度目かの溜息が洩れた。

家路を急ぐ人々が行き交う、相変わらずの喧騒の地下街を歩く。

一枚のポスターが眼に留まった。

『子供たちの笑顔は、この国の未来だ。NO BORDER……』

咽る様なこの場所を離れよう。この閉塞感には耐えられそうもな

い。地上に出る階段に自然に足が向いた。

夕暮れの気配が忍び寄っていた。さすがに日中のあのうだるような熱気は幾分かは緩んでいた。

次の駅まで歩いてみようか・・・客待ちのタクシートのテール・ライトが夕暮れの中で赤々と点滅する。

少しだけ風がでてきたようだ。

グランド・ホテル一階のスター・バックスでカフェ・モカのトールをオーダーし、一口飲みながら、自動ドアを潜る。

ふと見上げると、新聞社の電光掲示板がディスプレイの着陸延期を伝えていた。

遠くから見ればどんなものだってキレイに見える。

この星だつてきつとそうなのだ。

貧しさに打ちひしがれようが、テロがあろうと、飢餓や疫病で多くの命が奪われようと、みんなここに帰ってくるんだ。

帰るべき場所はここしかない。

信号待ちの盲導犬を連れた障害者とすれ違う。

「お前は満足なのかい、一生この人の眼の代りをして・・・」

一瞬、ラブドールは僕を見、そして、頷いた。

「意味のある人生だよ・・・私にはね・・・」

駅周辺のランドマークでもあるJRタワーの光が辺りに異彩を放ち、札幌の中心になりつつあるここは、多くの人でこった返していた。

雑踏の中で味わう孤独・・・夜の闇が支配しはじめていた。

街頭スピーカーから繰り返し流れるニュース

【郵政民営化否決され、小泉首相、衆議院解散、総選挙を決断・・・】

この国がどう変わろうと、日常はそうおいそれとは変わらない。

いつもの、そして、ありふれた一日は、まるで、安っぽいテレビ・ドラマのお決まりのハッピーエンドのように繰り返され、流れてゆく。

一瞬、立ち止まり、そして、みんな、何事もなかったように帰るべき場所に帰るのだ。

このまま帰るのに踏ん切りがつかない僕がいた。

夜の帳の中で自分が帰るべき場所すら見つけれない僕がいた。暫く、立ち止まり、行き交う人々の群れの中にかつて少年だった頃の自分が消えてゆくのを見つめていた。

携帯の着信を開いた。

彼女からの着信が何度も続いていた。

『今日、寄っていいかな・・・』

『・・・久しぶりね、どうしたの、急に・・・』

『会いたくなつた・・・そんな理由じゃ駄目かい・・・？』

『・・・』

『とても会いたいんだ』

ほんの少しの沈黙・・・。

『ビール、買い置きとかないわよ・・・』

『近くのコンビニで買つてく・・・他に何かいる？』

『一ヶ月ぶりよ、知ってる？』

『ああ・・・』

『何度もテルしたわ・・・』

『ああ、知ってる・・・』

長い、長い、溜息・・・どちらからともなく・・・。

『待ってるわ・・・』

『・・・じゃあ』

何気なく口ずさんでいた。

『♪ 傷つけあうためじゃなく 僕らは出会ったって言い切れるかなあ』

今分かる 答えは一つ ただ一つ And I Love You・
・ And I Love You・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0276l/>

And I Love You・・・ありふれた日常のありふれた風景・・・

2010年12月10日20時26分発行